

荒之崎略○中

寶永四年關司政愈書曰、應永十二年、大波破此崎、或曰、文明七年八月八日、明應八年六月十日、甚兩大風、潮海與湖水之間、驛路沒、日箇崎千戸水沒在關東南十町計、白洲濱、佳吉、八王子之森間、尾崎孫兵衛者之祖、繫柑樹杪存命矣、其孫今在橋本、

〔東海道名所圖會三〕今切

後土御門院御宇、明應八年六月十日、大地震して湖と潮とのあいだきれて、海とひとつに成て入海となる、これを今切といふ、

〔後法興院記〕明應七年八月廿五日己丑辰時大地震、九月二十五日傳聞、去月大地震之日、伊勢參河、駿河、伊豆、大浪打寄、海邊二三十町之民屋悉溺水、數千人沒命、其外牛馬類不知、其數云々、前代未聞事也、

○按ズルニ、實隆公記、親長卿記、御湯殿上の日記、妙法寺記等ノ書ニ據ルニ、遠江ノ海ノ溢レテ荒井崎ヲ壞リ濱名湖ト通ゼシハ、蓋シ明應七年八月廿五日ノ事ナルベシ、然ルニ前條ニ載スル所ノ遠江國風土記傳及ビ東海道名所圖會ニ、之ヲ以テ明應八年六月十日ノ事ト爲セルハ誤レリ、サルハ茲歲地震アリシヨト、右二書ノ外ニ一モ所見ナキノミナラズ、當時此地ニ遊ビシ飛鳥井雅康ノ手記ニ係レル富士歷覽記ヲ檢スルニ、絶テ地震ノ事ヲ言ハザレバナリ、〔富士歷覽記〕二日、年六月、寺興寺本をいで、うふみうふみ恐有誤脱のわたりをし侍らんとて、舟まつほど、ひだりかたに、いなさほそえをみやりて、

いづくにかいなさほそえのわたし守我身をつくし侍と玄らずや

〔足利季世記二舟岡記〕義晴御誕生之事

同年○永正ノ八月七日ノ夜、大地震ヲビタシクシテ、國々堂舍佛閣顛倒シ、天王寺ノ石鳥居モ